真

今澄融

「結婚するの」
　恵那は幸せそうに目を細めた。私はそうなんだ、と当たり障りない反応を口にした。もっと大袈裟に驚いてあげた方がよかったかもしれない。大きく目を見開いて「そうなの！？　誰と！？　どこで出会ったの！？」と言うとか。恵那は私の言葉に深く頷いて、左手の薬指にはめられた、ピンクゴールドの指輪を撫でた。恵那の華奢な指によく似合っている。高校生の時より少し太ってしまった私の指には、到底はまりそうにない。
「昨日は成人式で、そのあと同窓会だったでしょ。あんまり、結婚したこと広められたくなかったから」
　確かに、昨日の恵那は指輪をつけていなかった。私は恵那の薬指をじっと見つめた。何て言えばいいんだろう。友達が結婚することになったら、どんな言葉をかけてあげればいいんだろう。「式はいつ、どこで？」「新婚旅行はどこ？」「引越しとかはもうしたの？」気になることが浮かんでは消える。それをわざわざ口にしようとは思えなかった。急に恵那が違う世界の人間になったみたいで、何も言えなかった。
「それでね、結婚式に来てほしいの」
　恵那は私の目をまっすぐ見て言った。もちろん行くつもりだった。けど、よそ行きのドレスなんて持っていないし、月のバイト代からご祝儀を捻出するのは正直厳しい。私は曖昧に頷いた。それでも恵那は、嬉しそうに目を細めた。真智には絶対来てほしかったの、とはしゃいで、式の日程と場所を教えてくれた。式は地元じゃなくて、横浜の式場で挙げるらしかった。ちょっと遠いな、と思ったが飲み込んだ。
「彼が横浜出身だから、横浜で挙げようって。ここからはちょっと遠いし、真智は特別だから泊まるところを用意するね」
　恵那は私に甘い。昔から私のことを気にかけてくれた。うっかり財布を忘れた日には全部奢ってくれるし、あとでお金を返そうとすると断られてしまう。恵那はとにかく優しいのだが、私は首を横に振った。
「いや、電車で二時間くらいだしいいよ。申し訳ないし」
　親に友達の結婚式と言えば、流石に交通費くらいは出してくれるだろう。それに、恵那に貸しを作りたくなかった。恵那は少しだけ悲しそうな顔でそっ

か、と言ったが、すぐにいつもの幸せそうな顔に戻った。恵那の口角はいつでも上がっていて、目尻は少し下がっている。恵那の結婚相手はきっと、この優しい笑顔に惹かれたのだろう。

「あ、それとね、友人代表のスピーチを真智にお願いしたいの。いい、かな？」

恵那は上目遣いでお願いしてきた。友人代表スピーチなんて人前に立つようなことはしたくなかったが、流石に断れなかった。私はゆっくり頷いて、頑張るね、と言った。何を頑張ればいいのかはわからなかった。大きな声でハキハキ喋れば、頑張ったことになるだろうか。聞いた人全員が感動して涙を流してしまうような、素晴らしいスピーチをすれば頑張ったことになるだろうか。恵那は私の返事を聞いて、やった！　と大袈裟なくらい喜んだ。まあ恵那の喜ぶ顔を見るのは悪くないな、と少しだけ口角が上がった。

「そのうち招待状を送るから、ぜひ返信してね。絶対だよ」

恵那に念を押されて、私は頷いた。恵那はこの後横浜に向かうらしく、解散となった。飲みかけのフラペチーノを片手にスタバを出て行く恵那に手を振ると、私は一人になった。一人になった途端、結婚という二文字で頭が埋め尽くされた。恵那が結婚する。成人したばかりなのに。恵那の結婚相手はどんな人なのだろう。どこで出会って、いつから交際していたのだろう。インスタのストーリーで恋人らしき人と出かけている様子を載せていたのは知っていたが、それが私の知る全てだった。知らないことがたくさんあって、私は取り残されてしまった。冷めたソイラテに口をつけた。美味しくなくて、飲み干さないで捨てた。スタバを出ると屋内なのに肌寒くて、アウターのジッパーを上げた。猫背気味で改札に向かい、実家の最寄りに向かう電車に乗り込んだ。

数日後、恵那から私宛の封筒が届いた。母が送り主を見て驚きながら渡してくれた。

「恵那ちゃん、結婚するの」

頷いて封筒を受け取る。指で丁寧に封を切ると、招待状が入っていた。招待状には二人の名前が書かれていた。屋代恵那の上に、門崎真司という名前があった。この人が恵那の結婚相手なのだろう。さっそく、同封されていた返信ハガキに名前や住所を作法に則って記入する。慶んで出席させていただきますなんて、一体誰が書き始めたのだろう。ご欠席は二重線で消す。ご住所の「ご」は消す。ご芳名の「ご芳」は消す。アレルギーが特になければ、ご配慮ありがとうございますと書き加える。何度も見返

して失礼がないか確認し、近所のポストに投函した。
「真智、ドレスとか無いでしょ。お母さんの貸そうか」
ポストから戻ってくると、母さんはクローゼットの深くに眠っていたであろう、淡い緑のドレスを引っ張りだして待っていた。結構大切に保管されていたらしく、汚れやほつれは無さそうだったので、それを着ることにした。サイズが合うかだけ不安だったが、結婚式まで質素な食事を心がければ大丈夫だろう。
「それにしても、早いわね。お母さんの時でも、二十歳で結婚なんて珍しかったわよ」
母さんは眉を下げて笑った。恵那はみんなの先を行きすぎて、そのままどこかずっと遠くに行ってしまいそうだ。
恵那とは高校で出会った。一学期にたまたま隣の席になって、英語のペアワークをきっかけによく話すようになった。恵那は手芸部で、私と違って手先が器用だった。当時私が好きだったゆるキャラのマスコットを編んでくれた。恵那は大人しくて目立たない生徒だったけど、可愛かったから密かに人気だった。サッカー部のキャプテンに惚れられたせいで、マネージャーたちにあることないこと好き放題言われていたのは気の毒だったが、全く気にしていなかった。そんな恵那の強いところを尊敬していたし、それに憧れていた。
数日後、ハガキが届いたのか恵那から電話が来た。結婚式で会おうねとしつこく言われるのは、悪い気がしなかった。それから、恵那の結婚相手のことを少し聞いた。どんな人なの、と当たり障りない質問をする。
「真司さんはすごく誠実な人でね。私のお願いを全部叶えちゃうの。すごいよね」
「どんなお願いも？」
「うん」
恵那は力強く頷いた。どんなお願いも叶えてくれる男性とは、どんな人なのだろう。恵那は結婚相手に日々、どのようなお願いをしているのだろう。そう言えば、スタバで会った時に身につけていたネックレスも、結婚相手が買ってくれたのだろうか。いろんなことが気になったが、詮索するのはやめた。恵那はいま間違いなく、幸せなのだ。
「素敵だね」
「うん！　あとね、真智のことも話してるよ」
「え、私？」
真智は高校の友達で、大切な人。真智は地元の大学に通ってて、将来の夢は国語の先生。真智は頭が

良くて、いろんなことを知ってる。
　恵那はやっぱり、私に甘い。私を信じすぎている。私はそんなに優秀じゃないし、国語の先生なんてもう目指してない。それに、大切な人だなんて。
「……ありがとう」
「真司さんも会いたがってるの。スピーチをお願いしたって言ったら、楽しみって言ってたよ」
「そう」
　電話越しに恵那に笑いかける。それじゃ、またねと恵那が言うので、私もまたねと言って切った。恵那の結婚式までに、スピーチの内容を詰めなければならない。

　恵那の結婚式は三月下旬となっていた。気がつけばすっかり春めいてきて、桜も咲き始めている。肌色のストッキングに足を通し、母さんから借りたパーティードレスに身をつつむ。天気予報を確認し、念の為白いコートを羽織った。夜は冷え込む可能性がある。最寄り駅まで来て、こんなドレスにハイヒールで電車に乗るなんて派手すぎるんじゃないか、と不安になった。箱ティッシュより少し小さいくらいのバッグを抱きしめて電車に乗り込み、横浜を目指した。横浜までは電車で二時間ほどだ。乗り換えが一度あるが、反対側の電車に乗り込めばいいので難しくはない。結婚式は午後一時からとなっている。
　やや早めに横浜駅についたので、タリーズに足を踏み入れる。なぜならスタバより少し空いているから。レジに並んで数分すると自分の番がやってくる。最近インスタでよく見るヨーグルト&アサイーを注文した。受け取りカウンターで渋い紫色と白が二層に連なったそれを受け取り、ちょうど空いた席に座った。甘酸っぱさと冷たさで舌がビリビリするのを感じながら、恵那が式を挙げる式場を調べた。横浜駅から徒歩十分ほどの、ちょっとかなり高そうなホテルだった。もっと煌びやかな格好をするべきだったかもしれない、と怖気ついてしまう。いくら新婦より目立ってはいけないとは行っても、地味過ぎるのは場違いだろう。ハーフアップに、パールと金のワイヤーで作られた花の髪飾りをつけただけでは、浮いてしまうかもしれない。途端にアサイーの酸っぱさが吐き気を誘発する。やっぱり、明るいところなんて来るんじゃなかった。こんな私がこの後スピーチをするなんて、恵那が笑われてしまう。胃がズンと重くなって動けなくなったが、地を這うようにして式場へ向かった。
　受付には知らない男女が四人いた。新郎新婦の友人だろうか、と思いながら「本日はご結婚おめでと

うございます」「心ばかりのお祝いでございます」などの、前日頭に叩き込んだフレーズを述べる。受付の人はにこやかにご祝儀を受け取ってくれた。友人は三万包むのが普通とまとめサイトに載っていたため、三万包んだ。この三万で色々買ったり食べたりできただろうに、と思ったが、別に欲しいものも食べたいものも特に思い浮かばなかった。恵那は自分のやりたいことを見つけるのが上手だ。きっとこれからも幸せだろう。

結婚式をした後は、広いホールに移動して披露宴へ入る。一週間前から頭に叩き込んだスピーチのことで頭がいっぱいだった。そのせいで、ケーキ入刀は拍手もせずぼーっと眺めてしまった。そうとう美味しいであろう料理も全く楽しめなかった。両隣は知らない人ばかりで、目が合うと気まずい気分になった。恵那はずっと笑顔だった。真司さんは思っていたよりダンディな人だった。俳優で言うなら西島秀俊に似ていた。スーツがよく似合う人で、仕事でも普段から着こなしているのだろう、と思った。ただならぬ威厳と貫禄があったが、恵那の隣でにこやかに笑っていた。新郎新婦のお色直しも終わり、恵那は桜色のドレスに着替えていた。そろそろ友人代表のスピーチがやって来る。緊張で口が渇くのを感じながら、その時を待った。

後ろで勢いよく扉が開く音がして、会場がしんと静まる。異変に気づいたスタッフが扉に走っていくと、女性の甲高い悲鳴がした。

「やめて！　離して！　私はあいつを殺さないといけないの！！」

殺す、という動詞が出てきたのを聞いて、会場は一気に騒めいた。スタッフは新郎新婦を守るようにして集まった。

「あいつは！　私を捨てたの！！　私が先に婚約してたのに！！」

女性が必死に叫んでいる。一同は新郎新婦を見た。恵那は酷く混乱しているようで、過呼吸を起こしているのが見えた。それを真司さんが支えている。

「私から奪うな！！　絶対に殺してやる！！」

ついにスタッフを押し退けた女性は、真っ先に新郎新婦目掛けて走り出した。新郎新婦には男性スタッフがついていたため、女性はあっという間に薙ぎ倒された。軽く呻き声をあげて女性は倒れ込んだ。そうしてようやく、会場は静かになった。

「婚約者がいながら別の女と……」

誰かの呟きはこの空間の空気を激変させた。一斉にどう言うことなんだ？　と怒号に近い疑問が新郎新婦に投げつけられる。恵那はヒュウヒュウ息をし

ながら「真司さん、嘘だよね」と何度も訴えかけていた。肝心の真司さんは俯いたまま黙っていて、どうしようもなかった。まあ、そうなるだろうな。真司さんには婚約者がいたのに、恵那とお付き合いをして、結婚までしてしまったのだ。元婚約者がそれを知れば、黙っていられるはずもないだろう。私は脱力してその場に座り込んだ。座り込んだ私を体調が悪いと思ったのか、そばにいた知らない人が大丈夫ですか、と声をかけてくれた。私は顔に力が入らなくて、どんな表情をしているかわからないまま、大丈夫ですと言い続けた。スピーチはもう、しなくてよさそうだった。

結局あれで披露宴はお開きになった。どうやって家に帰ったか覚えていない。ただ、電車の窓に映る夜を眺めていた記憶だけがある。母さんが「結婚式どうだった」と聞いてきたが、なんと答えたか全く覚えていない。二階に上がって自分の部屋に入り、ドレスを脱いだ。メイクも落とさず、汗で蒸れたストッキングを履いたままベッドに倒れ込み、天井を見ていた。

後日ご祝儀の返金があった。恵那とは連絡がつかなくなってしまった。二人がどうなったのかもわからない。やっぱり、変だったんだ。二十歳で結婚なんて。相手は相当な年上なんて。実際歳の差がどれくらいなのかは聞いてないしわからないが、きっと十歳以上は離れているのだろうと思った。真司さんと並んだ恵那は、やっぱりちょっと幼すぎるように見えた。恵那はきっと騙されてたんだ。いや逆に、恵那が騙していたのかもしれない。途端に何もかもが嘘に思えて、けど、結婚するんだとニコニコしていた顔だけは本当であってほしくて、顔を歪ませて泣いた。別に私の結婚式が失敗に終わったわけじゃないのに、すごく悔しくて、枕に八つ当たりした。ボフボフと音を立てて埃が舞う。三万が返ってきてラッキー、だなんて思えそうになかった。

「真司さんはすごく誠実な人でね。私のお願いを全部叶えちゃうの」

あの時の恵那の言葉を反芻する。何がすごく誠実な人だよ。誠実だったら二股なんてしないだろ。なんで恵那の結婚を叶えてやれなかったんだよ。全部叶えちゃうんだろ。それくらい頑張れよ大人なんだから。真司さんの方が、恵那よりずっと大人なんだから。

桜が満開になり始め、新学期が始まるころだった。サークルの新歓準備の合間にスマホを見ていると、一件の不在着信があった。知らない番号だったけど、なんとなく恵那なんじゃないか、と思った。

サークル室の外に出て掛け直すと、やっぱり恵那だった。
「もしもし」
「真智だよね。真智……」
恵那は相当弱っているようで、声は掠れていて小さかった。あんなに幸せそうだった恵那は、どこにもいないみたいだった。風が吹いたら飛んでいってしまいそうな雰囲気が電話越しに伝わってきた。
「ごめんね。せっかく来てくれたのに、あんな」
恵那は何度も何度も謝っていた。最初は可哀想だと思ったが、だんだん苛立ちが生まれた。まるで、私に許してほしいみたい。そう思うと途端に冷めてしまって、もう切るよ、と心無い言葉をかけてしまった。言った瞬間、胸の奥が焼けるように痛んだが、もう仕方のないことだった。恵那はしばらく黙っていた。唇の震えが伝わってくるようだった。
「……そう、だよね。ごめんね。ありがとう。ごめん。電話、掛け直してくれてありがとう」
それじゃ、と言って恵那は電話を切った。電話が切れる瞬間、駅のアナウンスが聞こえた。なんだか妙な寒気がして、新歓の準備に全く集中できなかった。顔色が悪いことを同期に指摘されたが、笑って誤魔化した。心臓がうるさくドクドクするのに耐えながら、予想が当たらないことだけを願っていた。家に帰って、テレビもネットニュースも見ないようにした。見たら全てが終わってしまう気がした。何も手につかなくて、自室のベッドに仰向けになって天井を見ていた。小さい頃から見慣れた天井なのに、木目がうっすら笑みを浮かべているように見えて気持ち悪かった。目を閉じて、心臓を落ち着けることだけを考えた。
「真智、電話」
ドアのノックで飛び起きると、母さんがいた。部屋は真っ暗で、廊下の明かりで母さんの姿がぼうっと浮かんでいた。一階に降りて固定電話の受話器を受け取ると、男性の声がした。名乗られる前に、真司さんだと思った。
「……恵那が」
「あなたが、彼女の名前を呼ばないでください」
相手が真司さんだとわかって、私は思わず怒鳴りつけてしまった。真司さんはそれに一切反論も弁明もしなかった。
「……屋代さんが、亡くなりました」
理解できなかった。恵那が、亡くなった？　途端に冷や汗が止まらなくなった。体温が急激に下がるのを感じて、意識がどこかに飛んでいきそうだった。母さんが咄嗟に肩を支えてくれなければ、倒れ込んでリビングの床に頭を打ちつけていただろう。

「倖田さんは、屋代さんの一番の友人だと聞いていました」
　あなたの大事な友人を、守れなくて申し訳ない。真司さんの声は震えていた。私は息をするのに必死で、真司さんの話とか本当にどうでもよかった。今すぐ時間が巻き戻るように願った。同時に、そんなことが無理なのもわかっていた。
「……恵那は、あなたのことを誠実な人って言ってました。私と同じ字が名前に入ってるのを知って、ちょっと親近感も感じてました。でも、全部嘘でしたね」
　自分の無力さと、恵那への態度に苛立って、訳のわからないことを真司さんにぶつけた。真司さんはあの時みたいに、反論も弁明もしなかった。なんか言えよ、と怒鳴りそうになるのを抑えると、代わりに吐き気が込み上げてきた。受話器を持つ手が震えて仕方なかった。
「……もう切ります。もう二度と関わらないでください。私にも恵那にも」
　これ以上、私の中の恵那を壊されたくなかった。乱暴に電話を切ると、母さんが酷く悲しそうな顔をしていた。そんな態度ないじゃない、と怒られなかったのは、母さんも事のあらましを真司さんから聞いたからだろうか。私はよろめきながら二階に上がり、真っ暗な部屋に閉じこもった。恵那に何もしてやれなかった。スピーチの原稿は机の引き出しにしまったままだった。結婚式をやり直すことがあったら、読もうと思っていた。恵那が死んでしまったのは。私のせいかもしれない。私が、とどめをさしてしまったんだ。あの時私が、恵那に優しい言葉をかけることができていたら。いつものスタバで会おうって言えていたら。
　私は、恵那の結婚相手よりも最低で、無力で、どうしようもなかった。果たして私は、恵那の一番の友人だったのだろうか。自分の名前に真という字が入っているのがおかしく思えた。